

特集

小児看護は大丈夫か？

子供の数が減り続けている現在、医療界もその影響と無縁ではありません。少子化と小児科医の減少により小児病棟は次々と閉鎖されており、入院日数の短縮化で大人に比べて比較的可能だった濃密なかかわりも少なくなり、それに伴い学生の実習も困難になっている実態があります。さらには、若い看護師自身、子供に接した経験がなくなり、患児とのコミュニケーションがうまく図れないケースも出てきているようです。

現在の小児看護が置かれた状況と、その重要性を認識してください。

小児看護の未来はどちら？ 三輪百合子
都心の総合病院における小児看護の必要性 松原栄子
地方の基幹病院で小児看護は生き残れるか？ 江口恵子
これからの小児看護実習はこうやって乗り切れ！ 西田志穂

招待席

打倒！ ALS 川口有美子さん

特別記事

安全な殿部筋肉内注射を行なうために 佐藤好恵
手洗いを見直す 手袋で安心していませんか？ 前田ひとみ

新連載

A-LSD！ 病床からの誘惑・1
——西川勝・志賀玲子・久保田テツ
世界の感受の只中で・1 ——天田城介

連載

看護師のためのセルフコーチング
自分の人生をコントロールするために・2 ——鱸伸子・柳澤厚生
患者・看護師双方のためのアクティビティケア・2 ——六角僚子
見えないものが見えてくる「臨床感染症」とのつきあい方・2 ——今村顕史
HIV/AIDS ケア 再考・2 ——島田恵
Pipo さんの疾走ダイアリー・2 ——Pipo さん
アフリカが紡ぐ命の物語・5 ——井上冬彦
悩めることも才能だ！ 宮子あずさのお悩み外来・17 ——宮子あずさ

看護学雑誌 第71巻第4号 2007年4月1日発行(毎月1回発行)

発行/株式会社医学書院 代表者 金原優

〒113-8719 東京都文京区本郷5-24-3

Published by IGAKU-SHOIN Ltd. 5-24-3 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo © 2007, Printed in Japan

1部定価 1,260円(本体1,200円+税5%) 年ごめ予約購読料 13,200円(税込、送料弊社負担)

・定期購読のお申し込み先/(株)医学書院販売部 TEL 03-3817-5659

・第69巻以前のバックナンバーのご注文先/(株)東亜ブック TEL 03-3985-4701

「看護学雑誌」編集室(担当/鶴淵・大野・小田嶋) TEL 03-3817-5772

E-mail kangaku@igaku-shoin.co.jp 医学書院ホームページ http://www.igaku-shoin.co.jp

本誌に掲載する著作物の複製権・翻訳権・上映権・譲渡権・公衆送信権(送信可能化権を含む)は(株)医学書院が保有します。

JCLS <(株)日本著作出版権管理システム委託出版物>

本誌の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に(株)日本著作出版権管理システム(TEL 03-3817-5670, FAX 03-3815-8199)の許諾を得てください。本誌掲載論文・記事のタイトル頁最下段に記された「0386-9830/07/¥250/論文/JCLS」は、1論文1回複写につき250円を要することを明示したものです。これは表示のない論文等にも適用されます。JCLSへのご連絡の際には、筆頭著者名・論文名と併せて本表示をご掲示くださるようお願いいたします。

編集後記

●読者をよけい疲れさせることにはしな
いか……という不安を少しもちつつも決行
した「看護研究」の特集。しかし、そんな心
配は無用でした。研究をサポートする立場
の方も、実際に研究を行なうスタッフも、
「確かに研究は大変」という正直な立ち位
置から、真摯に論を進めてくださっています。
今はまだ、「研究はやりたくない」という思い
を抱えた人のほうが多いのが現状かもしれ
ません。でも、「やってよかった」と思える一
瞬の積み重ねのなかに、計り知れない可
能性が秘められていることを感じていただ
けたら幸いです。看護研究が嫌な理由は
何なのかを上司とともに考えながら、日頃
の疑問・不満を解決していくという意味でも、
ぜひ研究を始めてみてください。【鶴淵】

●今号から多くの新連載が始まりましたが、
同時に写真で現場の様子を伝えるコー
ナー「EYE EYE」もスタートしました。今ま
では取材に行き、おもしろい試みや工夫、
興味深い施設などを目にしても、原稿の中
の図としてくらししか紹介できませんでし
たが、これからはこのコーナーを利用して、
できるだけその場の空気が伝えられるよう
に、誌面を構成したいと思います。読者の
皆様も「こんなところを見てきてほしい」と
いう希望などありましたら、編集室までご
連絡ください。もっとも、現場の息吹が必ず
しも2ページに納まるとは限りません。今
回取り上げた「いのちの応援舎」にしても、
“招待席”をプラスしてもまだまだ紹介した
い内容があります。というわけで、今回は
弊社発行の「助産雑誌」4月号にも関連記
事が掲載されています。合わせてご覧くだ
さい。【大野】

●院内の研修や病棟の取り組みということ
だけでは、看護研究はもったいない。現場
のことは現場の方が一番よくわかり、ある
いは似たような疑問をもっているはず。あ
とは、それを知らしめる、あるいは解決す
る方法や考え方を身につければよいわけ
です。地域の大学がもっとオープンになっ
て交流などがもっと進めばよいですね。最
近、めっきり事例研究が少なくなりました。
個人情報保護に対応しなければならない
事情があるのでしょうか。看護師はどうか
かわったのか、患者さんはどう変わったのか、
看護師は何を感じたのか、自分の行なっ
た看護を表現し共感をする手法として、看
護研究が使われることが、もっとあってい
いと思うのですが。【小田嶋】